

原始

第1章 日本文化のあけぼの 2. 農耕社会の成立 (2) 小国の分立

山陰地方最大規模の弥生集落

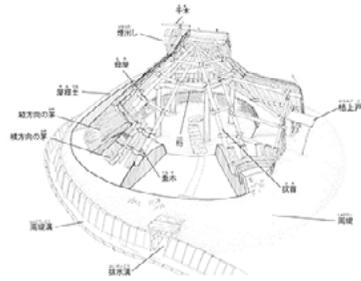
むきばんだ  
— 妻木晩田遺跡 —



妻木晩田遺跡全景



竪穴住居跡★



竪穴住居図解★



草屋根の竪穴住居復元★



土屋根の竪穴住居復元★

★印の画像はクリックすると拡大画像が表示されます。  
\*「竪穴住居跡」画像は大山町、他の画像は鳥取県立むきばんだ史跡公園より提供。

解説

■ 妻木晩田遺跡とは

鳥取県西部、西伯郡大山町と米子市淀江町にまたがる日本海を望む丘陵上に位置し、弥生時代中期後葉から古墳時代初め（1世紀～4世紀の約300年間）に営まれた村である。東西約2km、南北約1.5kmに広がり、佐賀県吉野ヶ里遺跡の約3倍の広さを持つ。約152ヘクタールが国の史跡となっている。

現在まで、約450棟の竪穴住居跡、約510棟の掘立柱建物跡のほか、大小の四隅突出型墳丘墓からなる洞ノ原墳丘墓群等も発見されている。出土遺物では、鉄器や鉄片などが400点以上、ガラス玉約40点、中国鏡片などが見つかった。

■ 「妻木晩田」村の竪穴住居は、どのように復元できるのか

一般的に竪穴住居跡から、当時の竪穴住居を復元するのは容易ではない。なぜなら、木材が腐って消失しているため、上屋の構造を想定することが難しいからである。ただし、妻木晩田遺跡内の焼失住居から、残存する炭化部材の形状や木材の種類がわかり、青銅鏡に表現された建物の造形なども復元の手がかりとなる。竪穴住居は半地下式で、保温力のある土壁に囲まれており、高温多湿な夏期より冬期に適した住居だったと思われる。床の中央には排水用と考えられる深さ30～50センチ程度の穴があり、それと柱穴の間に炉が設けられ、床の上で火を焚いていた。

住居跡の平面形態は、円形、隅丸方形、多角形、五角形、六角形、三角形と多彩な形状が見られるが、「妻木晩田」村に人が住み始めた1～2世紀では円形が多く、最盛期を迎えた後期後葉2世紀後半以降は隅丸方形が多くなる（理由は不明）。

屋根は柱、梁、桁、垂木などの部材を組み合わせて作られており、硬く湿度に耐えるクリ、スダジイ、ケヤキなどの広葉樹が多く用いられた。また、ススキやヨシなどの茅を葺いた草屋根と、草屋根の上に土をのせた土屋根があったと考えられる。土屋根は冬期の保温や強風時の屋根の損壊防止に役立ったと思われる。

(担当：吉田 学)

参考資料

- ・濱田竜彦『日本海を望む「倭の国邑」妻木晩田遺跡』新泉社（2016年）
- ・「甦る弥生の国邑」妻木晩田遺跡 [鳥取県立むきばんだ史跡公園](#)（2012年）

★の写真及び図は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。